慶應義塾 医学部新聞

発行所
三四会医学部新聞編集室
〒160―8582
東京都新宿区信濃町35
電話(3353)1211 内線64996
会員については会費に購読料が含まれる
発行人　武田　純三
毎月　１回20日発行

三四会ホームページ

信濃町駅前・各種診療
慶應義塾大学病院
●外来診療時間＝午前8時40分～午後12時 午後1時～午後4時（特殊外来）
●電話＝03（33353）1211（大代表）

第65回東医体

部分開催となるも大健闘の慶應

部分開催に至るまでの経緯

恒例行事であった東医体が3年ぶりに「部分開催」されるまでの道のりは、想像以上に長いものでした。

約半年に及んだ開催可否の検討では、各大学の部活動再開状況や市中の感染状況などが判断材料となりました。今年3月の第1回定例理事会での判断は延期となり、5月の運営委員会での協議にて、第65回大会の開催が正式決定となりました。待ち焦がれた東医体の開催に向け、コロナ禍で実現可能な要項の策定を各競技で進めました。7月に入り、急激に感染者が増えてきましたが、医学部長は多くの関係者と相談し、慶應義塾大学医学部は、「会長と部員が十分な話し合いをおこない、適切なガイドラインを作った上で、それを守るのであれば、東医体に参加することを認める」という判断をされました。

しかし開会式2日前、第7波の急拡大を受けて臨時理事会が開かれました。開催可否判断を競技ごとに委ねるものと決定しましたが、開催間際に運営本部より、これ以上ない厳格な感染対策が追加され、結果的に6競技のみの実施となりました。「部分開催」とはなりましたが、伝統の維持への大きな一歩を踏み出すことができました。

一方で、開催目前で競技が中止となり、涙を呑んだ学生が多くいたことも事実です。この経験を活かし、今後の諸大会が「完全開催」となるよう、医学部体育会役員一丸となって取り組んで参ります。

末筆とはなりますが、東医体開催や本塾の大会参加に尽力してくださった関係者の皆様方に、この場をお借りして深く御礼申し上げます。

（医学部体育会委員長　美濃地駿介　5年）

※写真では撮影時のみマスクを外しています

開催競技と結果

競技	結果
馬術	馬場馬術団体（松田高幸君、齋藤瑠子君）3位、障碍飛越個人男子（松田高幸君）2位
ヨット	総合6位入賞、女子戦個人（岩田侑子君、木曽万絢君）5位
水泳	総合優勝、男子総合優勝、女子総合6位入賞
ボート	男子ダブルスカル（金井悠太郎君、岡崎駿介君）1000m6位

端艇部

3年ぶりの大舞台 逆境の中健闘した部員たち

8月12、13日に戸田漕艇場にて東医体ボート競技が行われた。3年ぶりの試合であり、一部の部員にとっては初の東医体でもあることから、皆緊張の面持ちで試合に臨んだ。今年度は男子ダブル3艇の出漕予定だったが、クルーの体調不良により2艇での出漕となった。

惜しくも1艇は予選敗退となったが、残るもう1艇（6年岡﨑君、5年金井君）は決勝に進出、6位という成績を収めた。当クルーは乗艇練習期間が大幅に制限された中での出漕となったが、練習期間のハンデを感じさせない漕ぎで端艇部の底力を見せてくれた。

今年度は全クルーの練習が十分にできない中、全員で協力して東医体に挑むことを目標に努力を重ねてきた。結果は芳しくなかったが、全員が今の実力を出し切り、約4分間、1000㍍の道のりを一生懸命漕ぎ切った。

現役部員にとってはこれが最後の東医体ではない。来年度もまた新しい闘いが待っている。今年の悔しさをバネにし、「水の王者慶應」の名を来年こそ奪還して欲しい。

（6年　福尾佳奈）

全体集合写真

男子ダブル（岡﨑、金井）

水泳部

祝・男女総合優勝！ 男子総合優勝、女子総合6位入賞

水泳部門は、「男子優勝・女子6位入賞」「男女総合優勝」を成し遂げた。

新型コロナウイルスの影響で何度か開催が危ぶまれたものの、主幹である弘前大学や各校主将の賢明な働きかけにより無事に2日間の日程を終えることができた。声を出しての応援が禁止され、拍手のみの応援となるなどコロナ禍前の東医体とは多少異なったものの、3年ぶりに開催された東医体の会場では熱戦が繰り広げられた。

男子は、4×200㍍フリーリレー1位（5年三輪智也君、3年日隈大瑚君、1年鷺見祐介君、2年由良弘二朗君）、4×100㍍フリーリレー1位（鷺見君、6年川内将裕君、三輪君）、4×50㍍フリーリレー2位（4年植田真翔君、鷺見君、由良君、三輪君）、個人種目でも着実に点数を積み重ね、前回の2019年東医体と同じく見事男子総合優勝をもぎ取った。

女子は、出場選手全員が大学から初心者で競泳を始めた選手であったものの、4×50㍍メドレーリレー5位（4年安本紗菜君、4年金智順君、5年澤利咲君、4年清水さとみ君）、4×100㍍フリーリレー5位（安本君、清水君、金君、4年藤塚晴紀君）、個人種目でも多くが入賞を果たし、女子総合6位入賞となった。

主将の藤塚晴紀君は、「この3年間キツい練習をこなしてきた、水泳部員43人で勝利を掴み取ることができました。」と喜びを語った。

（3年　伊庭知里）

男女総合優勝を果たした水泳部

1年間部活をけん引した幹部（104回）

馬術部

団体総合3位 5年ぶりの快挙！

8月1日から3日の3日間にわたり、静岡県の御殿場市馬術スポーツセンターにて第65回東医体馬術部門が行われた。本塾馬術部は団体総合3位、銅メダル、トロフィー獲得の大健闘をみせた。総合入賞は2017年以来、およそ5年ぶりの快挙となる。この結果について、主将の松田高幸君（5年）は「2022年度の東医体では新型コロナウイルス流行のため2年ぶりの東医体となり、活動に様々な制限を伴っていましたが、久々に表彰台に返り咲くことができてとても光栄な思いです。」と語った。

ジムカーナの個人戦では宇佐美優衣君（3年）が出場し、リーグ内2位、全体5位という成績を収めたほか、障碍飛越の個人戦では松田高幸君、齊藤璃子君（3年）が出場し、齊藤君はリーグ内3位となり、松田君はリーグ内1位となって予選を勝ち上がった。その結果、決勝戦で松田君は2位を勝ち取り、銀メダル獲得を果たした。2年ぶりの東医体で初めて入賞した松田君は「今までは部員数も少なく、試合参加では応援がほとんどありませんでしたが、今回の東医体では大勢の後輩に会場でサポート・応援していただき、そのおかげで強いプレッシャーの中見事に銀メダルを掴み取ることができました。」と語り、周囲への感謝を強く示した。また、馬場馬術の団体戦では松田高幸君、齊藤璃子君が出場し、見事3位を勝ち取り、銅メダル獲得を果たした。次期主将として3年生で東医体初参加ながら、3位入賞に貢献した齊藤君について、松田君は「新型コロナウイルスの流行により入部して以来ほとんど試合に出場する機会がなく、今回の東医体に向けて全力で努力していました。今では先輩顔負けのモチベーションで部活動に精力的に取り組んでおり、将来がとても楽しみです。」と熱い期待を寄せる。

例年にも増して好成績を収めた馬術部の今後更なる大躍進を期待してやまない。

（3年　頃安美玲）

齊藤璃子君（105回）

松田高幸君（103回）

ヨット部

3年ぶり悲願の東医体 総合6位

第65回東日本医科学生総合体育大会（東医体）が8月3日から7日にかけて神奈川県江の島ヨットハーバーで開催され、慶應義塾大学医学部ヨット部が総合6位の結果を収めた。7月下旬以降の感染急拡大のために開催自体が懸念されたが、徹底した感染症対策下で無事に閉幕した。

8月4日の女子戦では、岩田侑子君（2年）、木曽万絢君（2年）ペアが個人5位に、東医体本戦では、星野聡介君（4年）、金実紀君（3年）ペアが個人9位に入賞した。総合成績は結果的に6位入賞となった。

4年生以下が出場する新人戦であり東医体の前哨戦である関東医科歯科大会では総合3位の好成績であった。畑本真吾君（4年）、松尾昂朗君（3年）ペアが個人2位に、星野聡介君、金実紀君ペアが個人9位に入賞した。

東医体で個人5位の成績を収めた岩田侑子君（2年）は、「女子戦に出場した唯一の2年生ペアであり、他と比較して経験値が低い状態でしたが、予想以上の成績を収めることができ、貴重な経験になりました。来年の優勝目指して練習に励みたいと思います！」と意気込みを見せた。

大学始めの選手が多く、数々の試合が中止となり大会経験も浅い中、3年ぶりの大舞台で戦い抜いた選手達に拍手を送るとともに、今後の活躍に期待したい。

（2年　梅原千里）

波止場に立ち並ぶヨット

海上での熱戦

第17回慶應赤倉アカデミーKAA ～今年のテーマは「AIホスピタル」～

三四会赤倉担当理事　深川　和己（68回）

KAAは2006年に始まり、2021年4月に慶應義塾の学生公認団体となり、三四会が後援する形になりました。2020年、2021年とオンライン開催でしたが、2022年はハイブリッド形式での開催となりました。

今年のテーマは「AIホスピタル」。とても興味深いテーマを熱くわかりやすく説明してくださった講師陣は、看護医療学部の小池智子先生、薬学部の青森達先生、そして慶應大学病院のAIホスピタル構想を陣頭指揮している陣崎雅弘副病院長の3名の先生方でした。

AIホスピタル構想成功のためにはいろいろな方々の協力協業が必要であること、AIを活用する際には考え方が重要であるなどのメッセージをいただきました。今後AI活用した更なる飛躍のためには現在学生のような若い方の活躍が期待されます。医療系3学部の学生たちに素晴らしいメッセージが届いたことと思います。

【ゲストスピーカーから】
副病院長／放射線科学（診断）教授
陣崎　雅弘（66回）

今回、講演の機会を与えて頂き、御礼申し上げます。学会と重なったため途中参加となりましたが、リクリエーションにも参加させて頂き、3学部の学生と楽しく交流させて頂きました。グループに分かれての人工知能関連のクイズ大会でしたが、大変よく準備されていて感心しました。講演では多くの質問があり、AIホスピタルへの関心の高さが伺えました。また、「先生はなぜ放射線科を選んだのですか」というような人生の選択に関わるようなものもあり、学生達に色々な面で興味を持ってもらえたことを嬉しく思いました。

全体を通して、学生達がとても活発で、こちらが元気をもらった感じがしました。今回は、信濃町での開催になりましたが、機会があればぜひ赤倉に行くことができればと思います。

【ゲストスピーカーから】
慶應義塾大学薬学部准教授
青森　達

実行委員の方からお聞きした講演会のテーマは、AIホスピタルとのことでした。私自身は慶應病院薬剤部で副部長を拝命しており、AIホスピタルのプロジェクトには当初から関わる機会をいただいていたので、薬剤部の担当プロジェクトのうち、調剤ロボットと薬剤搬送ロボットの話題を中心にお話をさせていただきました。かなりプラクティカルな内容になってしまい、「アカデミー」の名にふさわしいか自信はありませんでしたが、会場からもオンラインの方からもたくさん質問をいただけていたようだったので、安心しました。時間の都合もあり質問には全てお答えできず、申し訳ありませんでした。

本来ならば赤倉山荘に集って追加の議論をしたり、そのほかいろいろお話しできれば良かったのですが、それは次の機会の楽しみにとっておきたいと思います。伝統ある慶應赤倉アカデミーにお呼びいただき、ありがとうございました。

【学生から】
学生代表
原　明広（4年）

まずは、今回の講演会を開催するにあたり、協力してくださった全ての方に御礼申し上げます。一丸となって準備を進めてくれた委員の皆さん、私達学生の至らない部分を補助して下さった三四会の先生方、そしてお忙しい中足を運んで下さり講演会をしてくださった登壇者の先生方、本当に有難うございました。

今回の講演会は数年ぶりの対面方式であり、勝手が分からず難しい部分もありましたが、当日の光景を見て対面方式で開催することが出来たことを本当に嬉しく思いました。先生方の素晴らしいご講演を聞き、それに対して学生が相互交流を行うことが出来る空間こそが意味があると感じました。

また、慶應赤倉アカデミーがより一層盛り上がっていくことを願っております。

連合三田会大会2022 ハイブリッド開催決定！

連合三田会2022　つながろう、いま。つなげよう、未来。

慶應義塾連合三田会とは慶應義塾卒業生すなわち全塾員の同窓会組織であり、連合三田会大会は毎年おこなわれる塾員の交流の場、福澤諭吉先生の理念「社中協力」「人間交際」の象徴ともいえるイベントです。

今年の連合三田会大会は、10月16日（日）に現地（日吉キャンパス）とオンラインのハイブリッドで開催されます。昨年度新たに進化したオンラインサービス「デジミタ」によって、自宅からでも海外からでも、同期会や同窓会、趣向を凝らしたさまざまなイベント、記念品申し込みや福引抽選会に参加でき、今まで参加不可能であった方々にも連合三田会大会が身近になりました。

今年はデジミタを継承・発展させることはもちろん、さらに、日吉キャンパスにおける現地開催にも力を入れています。コロナ禍で2020年は中止、2021年はオンライン開催となり、3年ぶりの現地開催です。経験と叡智を集結し万全の感染対策で塾員とそのご家族をお迎えすべく準備を進めています。

医学部は、救護部会として救急対応を71回生中心に担当し、さらに、73回生中心に83回生との混成チームで三四会講演会と子ども向け医療体験型イベント「ドクターに挑戦」を企画しています。三四会講演会では、「つながる医学～データサイエンスから宇宙まで～」をテーマに、東京理科大学特任副学長で宇宙飛行士の向井千秋君（外56回）と医学部医療政策・管理学教授の宮田裕章君のお二人の講演と対談が予定されています。「ドクターに挑戦」では、救急蘇生、胃内視鏡、眼科３Ｄ手術、脳血管内治療、外科手術、ＰＣＲ体験など、実物の医療機器を使った体験型イベントを完全予約制で行います（９月予約開始予定）。

ぜひ、秋深まる日吉キャンパスにお越しいただき、新しい連合三田会大会をお楽しみください。

（保健管理センター小児科　内田敬子　73回）

鑑賞雑感

「火の鳥」は手塚治虫が漫画家活動初期から晩年まで描き続けた、命をテーマにした超大作です。その血を飲むと永遠の命が得られる伝説の鳥「火の鳥」をめぐり、はるか古代から遠い未来まで壮大なスケールで描かれています。その「火の鳥」を名前の由来とする国産初の手術支援ロボット「hinotori surgical robot system」が2022年5月に慶應義塾大学病院に導入され、5月19日に一例目となる前立腺全摘術を泌尿器科で実施致しました。

hinotoriは2013年に設立された株式会社メディカロイドによって開発されました。2020年9月に泌尿器科領域で保険収載され、他領域での保険収載が待ち望まれています。

手塚治虫は、「火の鳥」の復活編において未来のロボットについて描いています。現代社会において、既に様々な場面でロボットが活躍していますが、人間とロボットの共存について非常に考えさせられる内容となっています。メディカロイドは「人とロボットの共存」をコンセプトに手術支援ロボットの開発を開始しましたが、メディカロイドが目指すロボットが「人の代わりとなるロボットではなく、人に仕え、人を支えるロボット」であるという考え方に、手塚プロダクションが賛同し、「hinotori」の命名が実現しました。

現在当院では、da Vinci-Jhinotoriの2台体制でのロボット支援手術が開始されています。内視鏡医学の発展は目まぐるしく、手術室でロボットを見ない日は無くなり、多くの手術が内視鏡下に行われるようになりました。福澤先生は、「器械を以て膀胱内の淋石を砕て之を取り…察病の道を械器的に取るもの甚だ少なからず」と記しているように、100年以上前から内視鏡医学の発展を確信していました。慶應義塾大学病院は、2020年に開院100年を迎えましたが、この伝統を踏まえ、次の100年に向けて内視鏡医学の分野においても常に歩み続けています。

（泌尿器科学教室　武田利和　81回）